

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

北青葉山分館長に就任するにあたって

北青葉山分館長 吉 藤 正 明



平成11年4月から、加藤順二前分館長の後をお引き受けすることになった。北青葉山分館は、青葉山北キャンパスに位置し、理学部と薬学部の図書館として、昭和57年に設置され、現在に至っている。当分館の規模は、所蔵

冊数は約34万冊、雑誌の種類は約8千タイトル、また、科学史的にも貴重な文献類も多数所蔵し、その管理責任の重大さを痛感している。

最近、ヨーロッパのいくつかの大学の図書室や図書館を見る機会が多い。ケンブリッジ大学、ハイデルベルグ大学など、何れも、伝統ある大学であるが、そのような大学ほど、総合図書館は言うに及ばず、各部局ごとの図書館の充実を誇り、しかも、世の中の動きに、すばやく対応しているように見えた。すなわち、電子化などにも、極めて熱心であり、また、面積の拡充計画も、長期計画の中で着々と実行されているように思えた。大学のもつ使命感、そして、その附属図書館への市民の期待感が日本の現状とかなり違うことを痛感した。

さて、図書の充実をはかることは、図書館の果たすべき最も重要な使命である。しかし、限られた予算の中で、専門分野の違う学部や学科の要求をすべて満たすのはなかなか難しい。年々、雑誌や単行本、辞書類は値段が上昇しているにもかかわらず、それに伴う予算措置がなかなか追いつかない。また、学問分野の再編成や境界領域分野の活発化によって、次々と新しい魅力ある雑誌が発刊されている。そのような、新規タイトルを購入するかどうかについても、余り、積極的に踏み切れない状況にある。現在、購入中のどれかを中止しないと、それらが買えないという、苦しい予算状況にあるからである。もう少し、余裕のある予算が欲しいところであるが、それが、なかなか難しい。まずは、学内での重複ジャーナルを調査し、無駄な出費を極力避けることは、勿論であるが、どの部局、どの学科が責任をもって必要な雑誌を継続してとり続けるかについても、それを協議する場が必

要であろう。単に、負担金上の問題からのみ、利用頻度の少ない雑誌は早くやめた方がよいというような風潮は、大学全体の使命感を考慮すれば、戒めなければなるまい。

ところで、電子ジャーナル等の、新しい、しかも省スペースにもなるメディアを使っている雑誌の発刊状況は、現在目を見張るものがある。それらの所蔵と管理をすべき図書館、二次情報などのデータベース検索の中核としての図書館の役割を考慮すると、図書館はコンピュータと切っても切れない縁になってしまった。大学の大規模計算機センター等とも強く連携して、その役割を早めに認識して対処していかないと、取り返しのつかないほど、世界的う勢からおいでいかれてしまう危険性がある。予算措置とも大いに関連があるが、北青葉山分館を含む東北大学附属図書館が、早急にそのネットワーク網を拡充できるように努力したい。

ソフト面の充実に加え、建物の増築などについては、歴代分館長に引き続き、北青葉山分館の抱える最重点課題の一つとして強く要望していきたい。現在の建物は、昭和60年に完成したが、年々増え続ける蔵書を受容する場所がもう手狭になっている。殆ど見る機会のない雑誌類を集密書庫にしまう作業、或いは、これまでの重複雑誌類を箱詰めにする作業等を進めているが、集密書架を設置する場所や、ダンボール箱をしまう場所さえもなくなりつつある。大学院重点化などによって利用者数も増えていることでもあり、増築を早急に実現できるよう努力したい。

前館長のご努力で、空調設備が、ようやく北青葉山分館にも設置され、梅雨時期や、夏の暑い時期に、快適に図書館を利用できるようになった。ただ、電気料を自粛しなければならないので、常時、全館空調をする訳にはいかないのは残念である。

ゆとりある図書館を有する大学から、すばらしい研究が生まれることを信じて、また、図書館は人類の知的共通財産としての図書を保有し続けるが、これが、新たな研究への源泉であること、すなわち、「温故知新」をモットーに、図書館のために微力を尽くしたいと思う。

(よしふじ・まさあき)

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

東北大学附属図書館平成11年度企画展のご案内

附属図書館では、昨年度に続き今年度も貴重資料の展示会と記念講演会を下記のとおり開催します。

資料展示会では、「江戸文化のはじまり」と題して、江戸時代初期の社会、風俗、学問、文化に関連する貴重資料を多数展示します。また、この時期の事件として有名な赤穂義士関連の資料も展示します。

日 程 10月29日（金）～11月5日（金）
（10月30日（土）・31日（日）、
11月3日（水・祝日）も開催します）

時 間 10：00～17：00（但し、10月29日は
14：00～17：00）

場 所 東北大学附属図書館本館（青葉区川内）
視聴覚室

内 容

(1) 資料展示会

- 第1部 附属図書館所蔵貴重資料展「江戸文化のはじまり」
- 第2部 「絵葉書で見る宮城」～狩野文庫絵葉書コレクションより～明治・大正・昭和のはじめに発行された絵葉書の中から宮城県関係のものを展示します。

(2) 記念講演会

演題：「武士道と儒教」

～江戸幕府は朱子学を官学に定め、大いに儒教を奨励した。だが、武士道と儒教は、矛盾なく両立できていたのだろうか～

講師：浅野裕一（東北大学国際文化研究科教授）

日時：10月29日（金）15時～16時30分

場所：附属図書館本館2号館4階会議室

＊『儒教 ルサンチマンの宗教』（平凡社新書1999、5）の著者が武士道と儒教の矛盾にせまります。赤穂義士の武士道にも言及。

＊入場無料

＊お問い合わせ先 東北大学附属図書館総務課庶務掛 Tel. 022-217-5911

＊<http://www.library.tohoku.ac.jp/> にも案内を掲載中

東北大学記念資料室 平成11年度企画展

解剖・仙台医学専門学校－公文書に見る明治の医学校

東北大学医学部の前身、そして魯迅の留学先として著名な「仙台医専」。しかし廃止後80余年を経た現在、その実態を知る人は意外にも少ない。

今年度の企画展では、東北帝国大学の誕生とともに姿を消したこの仙台医学専門学校の姿を復元し、明治期の医学校・医学生の世界を味わっていただきたいと思います。

・展示内容……東北大学記念資料室所蔵の仙台医学専門学校資料（文書・写真）および関連資料（医学部長陵岡窓会所蔵資料など）

・期 間……11月2日（火）～19日（金）
＊11月3日（水・祝）、6日（土）は開館、その他の土・日曜日は休館いたします。

・時 間……午前10時～午後4時

・場 所……東北大学記念資料室 2階展示室

・連絡先……記念資料室（担当：永田英明、高橋早苗） TEL 217-5040

平成11年度システム地域講習会が開催された

附属図書館では、学術情報センターとの共催で、毎年システム地域講習会を開催しております。この講習会は、学術情報センターにおいても開催されておりますが、受講機会の拡大を図るため、全国10の地区で開催されているものであります。

本年度は、目録システム（図書コース、雑誌コース）講習会（目録システム業務担当職員にシステムの運用に関する知識・技術の講習）、ILL講習会（相互貸借業務担当職員にILLシステムの運用方法及び端末操作等に関する知識・技術の講習）並びに NACSIS-IR 講習会（代行検索担当者及び情報検索サービス利用者に知識・技術の講習）の4つの地域講習会を対象としています。（NACSIS-IR 講習会については、今年度から「新IR対応」となって今年は11月18日（木）の午後実施予定）



〔熱心な受講風景〕

会場は、端末機を装備している本館2号館の研修室を利用して行われ、講習期間は1～3日間で、その間に、それぞれの講習会の「システムの概論」、「端末操作解説」、「システムの実習」等の科目をカリキュラムに沿って、本館・分館の職員が講師・講師補助者となって、これまでの業務上の経験並びに最新の情報に基づき、受講者に懇切丁寧に分かりやすく講義・実習を行っておりました。

受講生は、東北地区の大学、研究機関及び高等専門学校の附属図書館から推薦された図書館職員で、各講習会12名ずつが参加して行われました。

それぞれの講習会とも講師等の熱心な指導と受講生のまじめな受講姿勢が相俟って充実したものとなり、受講生からは感謝の意を述べた感想が寄せられております。



〔修了証書が交付された〕

第30回国立大学図書館東北地区協議会総会

標記会議が4月22日（木）弘前大学を会場として東北地区7大学より28名が参加して開催された。

協議に先立ち、弘前大学岡崎館長の挨拶があり、続いて慣例により会場館の岡崎館長が議長に選出された。

出席者の自己紹介の後、次の協議題について討議が行われた。

- 1) 第46回国立大学図書館協議会総会関係資料の提出について
- 2) 国立大学図書館東北地区協議会に置く会議等について

- 3) 学内における学術情報基盤の整備と大学図書館の取り組みについて

- 4) 教育支援サービスの強化・充実について

- 5) 図書館管理運営体制の新たな組織等の形成と運営の在り方について

- 6) 第46回国立大学図書館協議会総会（平成11年）の開催について

- 7) 国立大学図書館協議会への加盟依頼の検討について

- 8) 国立大学図書館協議会総会時における研究集会の発表について

その結果、次のとおり決定した。

1. 文部大臣等に対して特に要望すべき事項
 - (1) 学術図書・雑誌・電子情報資料等購入費の増額について
 - (2) 電子図書館化に対応したシステムの高度化並びに施設の整備・充実について
 - (3) 有能な図書館職員の確保及び処遇改善について
2. 総会の分科会で検討するための協議題
 - (1) 学内における学術情報基盤の整備と大学

図書館の取り組みについて

- (2) 教育支援サービスの強化・充実について
- なお、平成11年度理事候補館及び所属部会並びに地区連絡館がそれぞれ次のとおり選出された。

理事候補館

弘前大学附属図書館（第1部会）

東北大学附属図書館（第2部会）

地区連絡館

東北大学附属図書館

平成11年度大学図書館職員長期研修に参加して

情報サービス課閲覧第二掛 湯 目 昌 史

標記の研修は、大学図書館の情報提供サービス体制の充実を目的に、学術情報の最新知識を教授して職員の能力向上を図るため、文部省と図書館情報大学が共催するもので、7月12日から30日まで行われました。

これまで受講された先輩方から「研修一番の意義は人とのつながりである」とのアドバイスをいただき、相応の投資を覚悟した私は儉約生活をすべく、着替えの束と3週間分のレトルト食品を背負い、梅雨空の筑波研究学園都市に乗り込みました。

今回の参加者は、男性20名、女性19名（国立32公立1私立5放送1）の計39名で、会場は、初めの1週間は筑波地区（図書館情報大学ほか）、後の2週間は東京地区（国立オリンピック記念青少年総合センターほか）に移動して行なわれました。

講義のコマ数は、総論9、学術情報の流通とネットワーク活動2、資料の整備と相互協力5、学術情報センターの活動と大学図書館業務のシステム化2、二次情報データベースの形成と利用3、情報検索サービス2、その他16で、39人の講師による39コマでした。今回初めてSCS（スペース・コラボレーション・システム）により、5つの講義が中継放映されました。

演習は、HTML文書による自己紹介ページの作成で、初心者でしたが専用ソフトのおかげで何とかできました。画面に初めてページが映った瞬間の感動は、手書き原稿が初めて活字に

なった時を上回るものでした。

施設の見学で印象深かったのは、図書館情報大学と東京工業大学の電子図書館、筑波大学中央図書館のボランティア導入、東京大学総合図書館の建築様式、国文学研究資料館の原本テキストデータベース、国立国会図書館資料保存課での一葉の古文書を2枚に剥離して裏打する匠の技、凸版印刷㈱での超ワイドスクリーン上の三次元映像を自在に視点移動できるバーチャルリアリティ・ラボラトリー等で、大きく視野を広げることができました。

また、班別のテーマで討議・発表する共同研究討議では、今回の研修のキーワードが『図書館の生き残り』であることを実感しました。

そのためには、①学術審議会の答申等国全体の動きを知ること、②実態調査等でひと・もの・かねの現状を知ること、等により学術情報政策の流れを読み、大局的見地に立った判断が重要であることを学びました。

この度の研修で得た知識と人的ネットワークを十二分に活かし、情報サービスの充実に努力して行きたいと思っております。最後に、私に参加する機会を与えていただきました皆様にこの場を借りまして感謝申し上げます。

※研修の要項は、図書館情報大学のホームページで当分の間保存されるとのことです。

(http://www.ulis.ac.jp/library/Choken/choken_home.html)

(ゆのめ・まさぶみ)

米国図書館見学紀行

情報管理課 対 馬 庸 二
北青葉山分館 後 藤 浩 子
情報サービス課 今 出 朱 美

— はじめに —

平成11年7月7日から15日までの日程で「海外の大学図書館等における電子図書館機能に関する調査」という目的のもと、米国シアトルにあるワシントン大学、アンアーバーのミシガン大学、その他2機関を訪問する機会を得た。海外出張の経験の無い者には、準備段階でかなり困難だったが、訪問先では丁寧に対応していただき、無事予定をこなすことができた。以下、その報告である。

— ワシントン大学図書館 —

7月8日、今回の出張の最初の訪問先であるワシントン大学を視察した。

ワシントン大学は、ワシントン州のシアトル市内にあり、1861年創立の歴史ある大学である。

図書館は23の図書館から構成されている。1990年代に建てられた Allen Library と1920年代に建てられた Suzzallo Library との対比がとりわけ美しい。

Librarian から Student Staff まで含め三百数十名もの人が図書館で働いている。

多くのデータベースや電子ジャーナルやその他のサービスが Web 上で利用できるようになっており、私たちの訪問直前の6月末に、OPAC の Web ベースへの移行が完了していた。電子図書館という点でもアメリカ国内で一目置かれる存在であるが、日本人の視察者はまだ少ないようだ。

当日は、館長の Ms. Betty Bengston を始め、Public Service、情報リテラシー関係、Collection Section (electronic information 含む) の各担当者や Undergraduate Library、Science Library、Business Library の各図書館の代表者らとお会いした。

館長とは、管理的な側面を中心にお話をした。



ワシントン大学

Odegaard Undergraduate Library 内の「Uwired Commons」

予算は2年間で約55億円ほどということで、日本とは桁違いであり、私たちには衝撃的な数字であった。

また、OPAC の改定に際しては、学部のメンバーとの話し合いに努めたこと、また、改定の意義には賛否両論あるものの、時代の流れを考慮した判断をしたとのことだった。公共図書館を含んだ他の図書館とのコラボレーションの実施や企業、地域住民へのサービスを視野に入れた図書館運営を考えている姿勢が印象的であった。

次に Public Service 担当の責任者、Ms. Betty Wilson にお会いした。

Ms. Wilson は、「誰がどこにいても利用できる」ことを電子図書館の目標としていること、電子化の進展とともに来館者数はむしろ増加していることなど、興味深い話をしてくれた。また、資料のデータベース化が進んでいるため、ILLでの資料請求に対しても、データベースから該当部分をピックアップすることができるという。

電子化の流れは速く、利用者のフォローとともに、図書館員自身のスキルアップに力を注いでいるということは、お会いした多くの関係者が口にしていたことであったが、Ms. Wilson の言葉を借りれば、最近の利用者、特に学生は“electronic sophisticate”であるということで、電子化の流れに順応している様子がうかがえた。

23ある図書館のうち、各図書館の責任者とともに数か所を見学したが、どの図書館にも、電子図書館機能利用者のために相当数のPCが確保されているとともに、e-mail専用端末（利用時間に5～10分程度の制限あり、しかもいすはなく、立ったまま利用する）が別置されていて、本来の図書館利用者（？）の利用が妨げられないようになっているなど、様々な興味深い工夫もみることができた。

後藤 浩子（ごとう・ひろこ）

— ミシガン大学図書館 —

ミシガン大学はデトロイトの西30kmのミシガン州アンアバーに在り、創立1817年で教官数約2,700人、学生数約37,000人の「Big Ten」と称される大学のひとつで、米国有数の大規模な大学です。

図書館はHatcher Libraryを中央館として約20図書館で構成され、400名ほどのスタッフがあり、蔵書数約700万冊を誇り、資料費だけで約\$13,000,000という規模になっています。

私達は7月12日に訪れ、9:00から16:00までのスケジュールでDigital Library（電子図書館）についてお話を伺ったり、デモンストレーションをしていただいたり、Hatcher Graduate Libraryを中心に館内見学をさせていただきました。

ミシガン大学はDigital Libraryの分野でも先端的活動が有名で見学に訪れる人が年間300名以上に及び、日本からも多くの見学者が訪れており、当日DirectorのWilliam Gosling氏にお会いした際に記帳したノートにも多くの日本人の名前が見うけられました。

Associate Director for Digital Library Initiatives（電子図書館担当の副館長）の下にDigital Library Production Services(DLPS)が構成され、20数名のスタッフがあり、図書館内の他スタッフや関係機関との協力により広範な活動を行っております。Digital Libraryとして各種プロジェクトが「実験的」な段階ではなく「サービス」として行われており、豊富なデジタルコレクションを有しています。

(<http://www.lib.umich.edu/libhome/DLI/projects.html>)

デモンストレーションを見学したプロジェクトを以下に紹介いたします。

Making of America(MOA)プロジェクト

(<http://www.umd.umich.edu/moa/>)はアメリカ社会史の基礎資料全文データベースで図書約1,600、雑誌論文約50,000を画像データと文字データ化し、SGMLによるコーディングを行いデータベースを構成しています。画像のみではなく、文字データ化することで全文検索が可能になっています。画像データはTIFF G4イメージとして保存され、利用者にPDF形式で提供する場合にはサーバ側でダイナミックに形式変換を行っているのには驚きました。これはデジタルコレクションを創造する上での豊富な経験による結果のようです。



ミシガン大学図書館
館長 Mr. William Gosling 氏と

PEAKプロジェクト (<http://www.umd.umich.edu/peak/>)はElsevier社との共同プロジェクトで電子ジャーナルの価格モデル実験を行っています。Digital Libraryの中でコンピュータシステムだけではなく、電子情報資源のサービスの在り方を探るという点で特徴的でミシガン大学における広範なDigital Libraryを象徴するように思われました。

Image Services(<http://images.umd.umich.edu/>)はデジタル化した画像データを作成・蓄積し検索可能にする機能を提供しており、画像データベースを必要としているシステムの提供先によりフレキシブルにシステムを対応させている。このサービスにより、膨大な量の画像データがオンラインでの検索・利用が可

能になっていました。

豊富なデジタルコレクションばかりでなく、多くのオンラインで利用できるデータベースや電子ジャーナルの導入、ネットワーク上の情報へのナビゲーションも整備され、2次情報と原文のリンクやZ39.50 プロトコルによる検索サーバが当たり前のこととして運用されているなど、Digital Library として遙か先を行っているという印象を強く受けました。また、図書館のWWW ページも充実しており、様々な情報をネットワークを利用して得ることが可能になっている点でも、システムばかりでなく図書館サービスとしても進んでいる Digital Library であると感じました。

Digital Library として1日の見学ではとても見尽くせない程に様々な活動が行われており、もっとテーマを絞り込む必要があったかと思われそうですが、先端に行く Digital Library の一端でも垣間見ることができ非常に有意義な経験になりました。

訪問の申込みに対して、朝から夕方までのプログラムを用意していただいたミシガン大学図書館の方々に大変感謝いたします。

対馬 庸二 (つしま・ようじ)

— Seattle Public Library/Central Library (シアトル公共図書館/中央図書館) —

今回、ワシントン大学、ミシガン大学を訪問することになったので、それぞれ滞在する都市で1ヶ所ずつ他の機関も訪問することにし、シアトルではホームページが充実していた公共図書館を見学することにした。

シアトル公共図書館は1891年に創立された歴史ある図書館で、分館が22館もあり、タイトル数約80万、188万 vol. の蔵書のある大規模組織である。予めメールで連絡をし、7月9日、ダウンタウンの中心にある中央図書館の館内案内をしていただいた。

1階正面を入るとすぐにカード登録・貸出・返却カウンターがあり、その奥に今回案内して下さった Gwen Scott-Miller さん所属の Humanity Desk がある。その他、Seattle Room

と呼ばれるシアトルの歴史紹介コーナー、レファレンスツール、アメリカ人の多くが関心をよせているという Genealogy(先祖探し) コーナーがあった。この階には日本語の小説が書架2本分もあったのが印象的だった。2階は Business & Technology Desk, Science & Social Science Desk, Magazines・Newspapers & Government Publications Desk があり、ビジネスマン向けの資料が多い。3階には、Children's Books & Video Desk, Lifelong Learning Desk の他、ここにも貸出・返却カウンターがある。(シアトルの坂は急勾配で、3階からも道路に出ることができる。) ここにはマイクロソフト社寄贈の16台のパソコンがあり、市民が無料で使うことができる。4階は Fine & Performing Arts Desk があり、レコード、CD が一店舗のように揃っていた。5階は事務室になっていた。



シアトル公共図書館 分野別カウンター

蔵書は QUEST という蔵書検索システムで分館を含めて検索でき、図書の取り寄せ、自分の貸出状況検索、電話帳がわりに個人の電話番号検索までできる。この検索端末は、各階に10台以上分散して設置されていた。

このように、ここまで細かくカウンターが分野別になっており、それぞれ専門のスタッフがついていることは日本ではまず見受けられない。この他、年間3,993のイベントがあり、16時から鍵っ子向けのプログラムがあって、日本でいう学童教育を図書館で担っているのには驚いた。また、エイズ、地震、サッカー、19世紀などテーマ別に多種多様の文献リストがつけられており、自由に持ち帰ることができる。こ

れも主題別に専門的知識のあるスタッフがいるからこそ可能なことであろう。

シアトルは英語を第二外国語とする人が多く、日本人も1万人ほど暮らしている。そういった人たちへの配慮も行き届いており、例えば日本語新着図書紹介、語学研修のパンフレットが置いてあったりする。これらのパンフレット類はどれも辞書なしで理解できるほどわかりやすく書いてあった。

今回の訪問にあたっては私達のために主に建物管理を担当している日本人スタッフのKobayashi氏もついて下さり、案内して下さい。Scott-Millerさんの対応が素晴らしく、相手にとっての外国語を、ゆっくり丁寧に話すということが、こんなにも聞き手に安心感を与えるのだということを身を以て体験し、これからのカウンター対応に実践しようと強く思った。

以上のように今回は1館しか見ていないので、アメリカの全ての公共図書館がこうであるとは限らないであろうが、少なくともシアトルでは図書館の社会的地位が高く、市民からも期待されており、それが年間23.5百万ドル（約28億円）という豊富な予算、設備、人材の確保に結びついているように思える。誰もが利用できる基礎的地位の公共図書館の水準の高さからみても、高等教育機関である大学図書館が世界をリードするのも当然と思えた。

— Bell & Howell Information and Learning 社 (旧 UMI) —

ミシガン大学のあるアンアーバーはデトロイトから約30キロ離れたところにあり、住人のほとんどがミシガン大学関係者という学園都市である。ここには電子資料、マイクロ資料で有名な Bell & Howell Information and Learning (以下B & H、今年 UMI から社名変更) 本社がある。7月13日、最後の訪問機関であるこの工場を見学した。

B & H 社は1938年、我が東北大学附属図書館の大型コレクションにもなっている Early English Books のマイクロフィルム化したのが始まりである。マイクロ資料製造の他、年間55,000の博士論文、10,000の修士論文を全世界

から集め、雑誌、New York Times を含む新聞のフルテキストと共に様々なデータベースとして ProQuest Direct で提供している。

今回見せていただいたのは Dissertation の処理と雑誌の電子化である。世界各地から集められた Dissertation は一枚一枚もの凄く早さで手作業により撮影され、次に落丁、撮影の出来具合をチェック、リールにプリント、と流れ作業で行われていた。また、依頼された論文のコピーと製本もこの工場で行なわれていた。次に案内されたのが雑誌の電子化の行程作業で、ここではテキスト部分と図表を分けて入力、チェック作業をしており、やはり大勢で流れ作業にて進められていた。入手された Journal は48時間内に電子化して提供できるというスピードで、てきばきと作業する様子はまるでベルトコンベアを使用した組立工場のような雰囲気だった。この工場が一番大きいのは著作権問題と思われるが、専門機関を設けて対応し、出来ない場合は直接交渉してクリアしていた。

今回この工場見学をして、最新の情報を提供するには想像以上に人手がかかっており、マイクロ資料やデータベースが高額なのもしかたないことだと思われた。

今出 朱美 (いまで・あけみ)

— おわりに —

米国の図書館を見学するにあたり、事前準備の段階から反省点を含めて、学ぶべきことが多かった。当日行ってみてはじめて、朝8:30開始夕方16:00終了のハードスケジュールが判明したり、あらかじめ多くの質問事項を準備していったため、訪問目的がかえってぼやけてしまうということもあった。また、言葉の壁は想像以上に厚かった。

しかしながら、電子図書館の先進性だけでなく、利用者の図書館に対する期待の大きさ、図書館員のプロフェッショナル意識の高さ、資料やレファレンスサービスの充実ぶりなど何もかもが新鮮に映り、有意義な訪問となった。

最後に、私たち3名を快く出張に送り出してくださった上司や同僚の皆様に、心よりお礼を申し上げたい。

平成10年度参考図書購入報告

参考図書類（文部省参考図書購入費，本学共通経費，川内地区部間共通費等）により平成10年度に購入し，本館レファレンス・コーナーに配置した参考図書のうち主な資料を下記のとおりお知らせします。

◆和 漢 書◆

1. 江戸幕臣人名事典
2. 韓国大学全覧
3. 現代政治学事典
4. 国立国会図書館蔵書目録 昭和元年～昭和24年（第1, 3, 4, 6編，著者名索引，書名索引）
5. 国立国会図書館所蔵博士論文目録 平成5年～平成6年
6. 社会学文献事典
7. 大韓民国出版物総目録 1996
8. 東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧 121～126
9. 日本欧米比較情報文化年表：1400～1970年
10. 日本考古学文献総覧
11. ネパール語辞典
12. フィンランド語辞典
13. ブルガリア語辞典
14. 南満洲鉄道株式会社刊行物目録
昭和5年，昭和10年，昭和11年，昭和15年

◆洋 書◆

1. American doctoral dissertations. 1997 1998
2. Comprehensive dissertation index. Supplement / 1997 5v.
3. Dizionario biografico degli italiani. 49-50
4. Deutsche biographische Enzyklopaedie. Bd. 8-9
5. Encyclopaedia Indica. v. 21-50
6. ITA. 7th ed. 3v.
7. Library of Congress. Subject headings. 21st ed. 5v.
8. Wer ist wer? Bd. 37
9. World list of universities and other institutions of higher education. 21st ed.
10. Who's who. 151st ed.
11. Who's who in America. 53rd ed.

◆その他主な継続受入資料◆

1. ダイヤモンド会社職員録 店頭登録 非上場会社版 1998
2. ダイヤモンド会社職員録 全上場会社版 1999
3. 外国会社年鑑 1998
4. 日本書籍総目録 1998
5. 出版年鑑 1998
6. 雑誌新聞総かたろぐ 1998
7. 国立国会図書館所蔵国内逐次刊行物目録 平成9年
8. American book publishing record. 1997
9. Books in print. 1998-1999
10. Commonwealth universities yearbook. 1997-1998
11. Cumulative book index. 1997
12. The Europa world year book. 1998
13. IBN. Pars C, Corpus alphabeticum. 1, Sectio generalis. 91-98
14. Internationale Bibliographie der Rezensionen wissenschaftlicher Literatur. Bd. 27
15. Internationale Bibliographie der Zeitschriftenliteratur. Bd. 32
16. Les Livres disponibles. 1999
17. The National faculty directory. 1999
18. Verzeichnis Lieferbarer Bueher. 1998 1999

附属図書館商議会商議員名簿

平成11年5月1日現在

所 属	氏 名	任 期
図 書 館 長	小 田 忠 雄	官 職 指 定 (9.12. 1～12.11.30)
医 学 分 館 長	高 坂 知 節	官 職 指 定 (10.12. 1～12.11.30)
北 青 葉 山 分 館 長	吉 藤 正 明	官 職 指 定 (11. 4. 1～13. 3.31)
工 学 分 館 長	本 間 基 文	官 職 指 定 (10. 4. 1～12. 3.31)
農 学 分 館 長	折 谷 隆 之	官 職 指 定 (11. 4. 1～13. 3.31)
事 務 局 長	伊 藤 博 之	官 職 指 定 (8.11.1～)
文 学 部 教 授	正 村 俊 之	11. 4. 1～13. 3.31
教 育 学 部 教 授	宮 腰 英 一	11. 4. 1～13. 3.31
法 学 部 教 授	水 野 紀 子	11. 5. 1～12. 3.31
経 済 学 部 教 授	猿 渡 啓 子	11. 4. 1～13. 3.31
理 学 部 教 授	倉 本 義 夫	11. 4. 1～12. 3.31
医 学 部 教 授	里 見 進	11. 4. 1～12. 3.31
歯 学 部 教 授	加賀山 学	11. 4. 1～13. 3.31
薬 学 部 教 授	竹 内 英 夫	10. 4. 1～12. 3.31
工 学 部 教 授	宮 崎 照 宣	9. 4. 1～13. 3.31
農 学 部 教 授	大 森 迪 夫	11. 4. 1～13. 3.31
国際文化研究科教授	臺 岐 泰 彦	11. 4. 1～13. 3.31
情報科学研究科教授	西 関 隆 夫	11. 4. 1～13. 3.31
金属材料研究所教授	福 田 承 生	6. 4. 1～13. 3.31
素材工学研究所教授	板 垣 乙未生	10. 4. 1～12. 3.31
加齢医学研究所教授	貫 和 敏 博	8. 4. 1～13. 3.31
科学計測研究所教授	宇田川 康 夫	10. 4. 1～12. 3.31
流体科学研究所教授	上 條 謙二郎	10. 4. 1～12. 3.31
電気通信研究所教授	矢 野 雅 文	10. 4. 1～12. 3.31
反応化学研究所教授	山 内 清 語	9. 4. 1～13. 3.31
東北アジア研究センター教授	磯 部 彰	10. 7.21～12. 3.31
遺伝生態研究センター教授	亀 谷 壽 昭	8. 4. 1～12. 3.31
大学教育研究センター教授	関 内 隆	9. 4. 1～13. 3.31
言語文化部教授	畠 中 美菜子	9. 4. 1～13. 3.31

人 事 異 動

平成11年9月1日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
11. 1. 23		高 木 忠	文部教官(簿)(情報管理課和漢書目録情報掛)	死 亡
11. 3. 31		加 藤 順 二	北青葉山分館長	任期満了
"		伊 藤 敏 敏	農学分館長	"
"		辻 英 雄	附属図書館事務部長	定年退職
"		村 岡 徹	医学分館事務長	"
"		菅 野 博 之	情報サービス課図書館専門員	"
"		佐 藤 義 則	情報サービス課参考調査掛長	辞 職
"		佐 藤 昭 子	事務補佐員(情報サービス課閲覧第二掛)	任期満了
11. 4. 1	北青葉山分館長	吉 藤 正 明		併 任
"	農学分館長	折 谷 隆 之		"
"	附属図書館事務部長	濱 賀 宣 昭	新潟大学附属図書館事務部長	転 入
"	弘前大学附属図書館事務部長	谷 内 聡	附属図書館総務課長	転 出
"	附属図書館総務課長	東 高 明	北海道大学附属図書館情報サービス課長	転 入
"	医学分館事務長	橋 原 孝 夫	山形大学附属図書館情報管理課図書館専門員	"
"	総務部人事課課長補佐	淵 辺 剛	附属図書館総務課課長補佐	配 置 換
"	総務課課長補佐	伊 東 正 勝	医学部附属病院総務課課長補佐	"
"	情報管理課図書館専門員	松 井 好 次	総務課システム管理掛長	昇 任
"	情報サービス課図書館専門員	五十嵐 行 衛	情報管理課図書館専門員	配 置 換
"	文部事務官(総務課システム管理掛長)	星 政 則	文部事務官(北青葉山分館管理掛長)	"
"	文部事務官(情報管理課電子情報掛長)	日 出 弘	文部事務官(情報管理課和漢書目録情報掛長)	"
"	文部事務官(情報管理課図書情報掛長)	及 川 恵美子	文部事務官(医学分館整理掛長)	"
"	文部事務官(情報管理課雑誌情報掛長)	菊 地 房 雄	文部事務官(情報サービス課閲覧第一掛長)	"
"	文部事務官(情報サービス課参考調査掛長)	前 田 裕 子	文部事務官(情報管理課逐次刊行物掛長)	"
"	文部事務官(情報サービス課閲覧第一掛長)	嶺 岸 文 男	文部事務官(情報サービス課閲覧第二掛長)	"
"	文部事務官(情報サービス課閲覧第二掛長)	千 葉 龍 郎	文部事務官(電気通信研究所総務課図書掛長)	"
"	文部事務官(医学分館整理掛長)	佐々木 勝 義	文部事務官(情報管理課洋書目録情報掛長)	"
"	文部事務官(北青葉山分館管理掛)	松 元 義 正	宮城教育大学附属図書館運用係長	転 入
"	文部事務官(電気通信研究所総務課図書掛長)	南 館 義 孝	文部事務官(北青葉山分館整理・運用掛)	昇 任
"	宮城教育大学附属図書館運用係長	佐 藤 百 代	文部事務官(情報サービス課閲覧第一掛)	転 出
"	文部事務官(工学部機械・知能系科事務室主任)	下 山 紀 子	文部事務官(総務課庶務掛主任)	配 置 換
"	文部事務官(理学研究科物理系専攻事務室主任)	塚 本 俊 郎	文部事務官(医学分館総務掛主任)	"
"	文部事務官(医学分館総務掛主任)	千 田 進	文部事務官(工学部等経理課管理掛主任)	"
"	文部事務官(農学部農学研究科用度掛主任)	村 田 哲 彦	文部事務官(総務課会計掛)	昇 任
"	文部事務官(総務課庶務掛)	菅 原 ちはる	文部事務官(総務課会計掛)	配 置 換
"	文部事務官(総務課会計掛)	佐 藤 秀 樹	文部事務官(経理部経理課共済掛)	"
"	文部事務官(情報サービス課相互利用掛)	鈴 木 智 博	文部事務官(総務課システム管理掛)	"
"	文部事務官(医学分館運用掛)	塚 田 弘 子	文部事務官(農学分館図書掛)	"

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
11. 4. 1	文部事務官（農学分館図書掛）	佐 藤 優美子	宮城教育大学附属図書館整理係	転 入
〃	文部事務官（金属材料研究所総務課図書掛）	沼 田 幸 子	文部事務官（工学分館整理・運用掛）	配 置 換
〃	文部事務官（工学分館整理・運用掛）	近 藤 真澄美	文部事務官（北青葉山分館整理・運用掛）	〃
〃	文部事務官（北青葉山分館管理掛）	後 藤 浩 子	文部事務官（金属材料研究所総務課図書掛）	〃
〃	文部事務官（北青葉山分館整理・運用掛）	湯 田 美喜子	文部事務官（北青葉山分館管理掛）	〃
〃	〃	佐 藤 初 美	学術情報センター事業部目録情報課	転 入
〃	学術情報センター管理部共同利用課	鈴 木 陽 子	文部事務官（医学分館運用掛）	転 出
〃	文部事務官（情報管理課図書情報掛）	柴 田 淑 子	文部事務官（情報管理課洋書目録情報掛）	掛名変更
〃	文部事務官（情報管理課電子情報掛）	横 山 美 佳	文部事務官（情報管理課和漢書目録情報掛）	〃
〃	文部事務官（情報管理課雑誌情報掛）	對 馬 庸 二	文部事務官（情報管理課逐次刊行物掛）	〃
〃	文部事務官（情報サービス課閲覧第一掛）	杉 山 智 章		新規採用
〃	文部教官（兼）（調査研究室）	小 川 知 幸		〃
〃	事務補佐員（工学分館整理・運用掛）	菅 野 篤 子	事務補佐員（情報サービス課参考調査掛）	配 置 換
〃	事務補佐員（情報サービス課参考調査掛）	原 千代子	事務補佐員（情報サービス課相互利用掛）	〃
〃	事務補佐員（情報サービス課相互利用掛）	伊 藤 艶 子	事務補佐員（工学分館整理・運用掛）	〃
〃	事務補佐員（情報管理課雑誌情報掛）	渡 辺 順 子	事務補佐員（情報管理課受入掛）	〃
〃	事務補佐員（情報管理課受入掛）	平 井 圭 子	事務補佐員（情報管理課逐次刊行物掛）	〃
〃	事務補佐員（情報サービス課閲覧第二掛）	佐 藤 公 子	事務補佐員（情報サービス課閲覧第一掛）	〃
〃	事務補佐員（情報管理課図書情報掛）	二 宮 佳 子	事務補佐員（情報管理課和漢書目録情報掛）	掛名変更
〃	〃	今 泉 みはる	〃	〃
〃	〃	高 橋 八千代	事務補佐員（情報管理課洋書目録情報掛）	〃
〃	〃	島 地 祥 子	〃	〃
〃	〃	岩 井 美紀子	〃	〃
〃	〃	守 谷 富美子	〃	〃
〃	〃	国 分 幸 子	〃	〃
〃	〃	及 川 優 子	〃	〃
〃	〃	二 宮 寧 子	〃	〃
〃	事務補佐員（情報管理課雑誌情報掛）	丸 本 六 穂	事務補佐員（情報管理課逐次刊行物掛）	〃
〃	〃	齋 藤 房 江	〃	〃
〃	事務補佐員（医学分館運用掛）	土 屋 鈴 子	事務補佐員（医学分館整理掛）	配 置 換
〃	事務補佐員（医学分館整理掛）	菊 地 友 信	事務補佐員（医学分館運用掛）	〃
〃	事務補佐員（情報サービス課閲覧第一掛）	石 井 裕 美		新規採用
11. 7. 1	事務補佐員（情報管理課図書情報掛）	湯 本 ひろ子		〃
11. 8. 31		石 井 裕 美	事務補佐員（情報サービス課閲覧第一掛）	辞 職
11. 9. 1	事務補佐員（情報サービス課閲覧第一掛）	熊 谷 弘 子		新規採用

会 議

◎学 内

11.7.12 平成11年度第1回分館長会議

・協議事項

- (1) 平成11年度図書館資料費の配分額（案）について
- (2) その他

・報告事項

- (1) 平成11年度図書館運営費（共通経費）について
- (2) 平成12年度概算要求について
- (3) 本館における学外者の利用について
- (4) 平成11年度東北大学附属図書館企画展示の実施について
- (5) 第46回国立大学図書館協議会総会について
- (6) 奨学寄付金の受入について
- (7) 平成11年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（データベース）の交付決定について
- (8) T-LINES 次期システム検討委員会について
- (9) 各分館からの報告
- (10) その他

11.7.14 平成11年度第1回附属図書館商議会

・協議事項

- (1) 図書館の将来構想に関する検討委員会（仮称）の設置について
- (2) 電子情報データベースサービスに関する検討委員会委員の選出について
- (3) 附属図書館及び記念資料室におけるセクシュアル・ハラスメントの防止等に関する内規（案）について

・報告事項

- (1) 平成11年度図書館資料費の配分額について
- (2) 平成11年度図書館運営費（共通経費）について
- (3) 平成12年度概算要求について

(4) 本館における学外者の利用について

(5) 平成11年度東北大学附属図書館企画展示の実施について

(6) 第46回国立大学図書館協議会総会について

(7) 奨学寄付金の受入について

(8) 平成11年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（データベース）の交付決定について

(9) T-LINES 次期システム検討委員会について

(10) 各分館からの報告

(11) その他

◎学 外

11.4.22～23 第30回国立大学図書館東北地区協議会総会（於：弘前大）

5.25 国立大学図書館事務部課長会議（於：東京医科歯科大）

5.26 国立大学図書館協議会受賞者選考委員会（於：東大）

5.26 国立大学図書館協議会常務理事会（於：東大）

5.27 国立大学図書館協議会理事会（於：東大）

5.28 国立大学図書館協議会と学術情報センターとの業務連絡会（於：学情センター）

6.22 第46回国立大学図書館協議会総会議長団等打合せ（於：東北大）

6.23～24 第46回国立大学図書館協議会総会（於：東北大）

6.25 外国雑誌センター館会議（於：東工大）

お 知 ら せ

平成11年度総合研修委員決まる

今年度の総合研修委員の選挙が、去る6月3日～4日の両日実施され、下記の5名が選出されました。

この1年間、職員のための研修計画とその実施に活躍されることが期待されます。

記

菅 原 淑 子
池 田 智 絵
横 山 美 佳
永 澤 恵 美
杉 山 智 章

編 集 後 記

本誌で紹介されていますが、国立大学図書館協議会の総会が6月の23日から24日にかけて、本館を当番館として仙台国際センターで開催されました。全国から約300名が集まる一大イベントも、本館、分館職員を始めとして、東北地区の図書館職員の応援を得て無事終了しました。

この余波等もあり、広報委員会（「木這子」の編集を担当）の開催が遅れ、第1号と第2号の合併号となってしまった。記事の一部には陳腐化したものがあるかもしれませんが、「木這

子」には記録性の面もありますので、ご了承頂きたいと思います。

昨今の情勢は厳しく、例年の定員削減に加えて、業務の合理化及び集中化による定員削減も始まりました。図書館の職員数減少に拍車がかかるなか、24時間開館、電子図書館化等図書館業務の拡大とも相まって、より一層の合理化、集中化が求められておりますので、今までにない思いきった図書館に変貌することが必要かと思われま

東北大学附属図書館館報「木這子」 第24巻第1・2号（通巻86・87号）発行日 平成11年9月30日

発行人 済賀 宣昭 広報委員長 東 高明

発行所 東北大学附属図書館 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5910